東北大学農学部における令和３年度 AO 入試Ⅱ期の検証

○倉元直樹*，片山知史**
東北大学高度教養教育・学生支援機構*，東北大学大学院農学研究科**

1.　問題

東北大学農学部（以後,「農学部」と略記する）は, 東北大学の学内組織である東北大学入試センターと協力して不断に学部入試の検討を行っている。2001（平成 13）年度入試に大学入試センター試験（当時）を課さない推薦入学Ｉを導入した。続々と他学部が推薦を AO 入試に切り替える中，一時期，東北大学で推薦入試を行う唯一の学部となったが，追跡調査の結果に基づき，2013（平成 25）年度入試から「AO 入試Ⅱ期」に切り替えて現在に至っている。推薦入試では書類審査のみによる第１次選考を実施していたが，AO 入試では書類審査のみで合否を判定せず, 筆記試験や面接試験等で全受験者に対して自分の実力の発揮機会を設ける，という方針がある。志願者側から見た場合, かつての東北大における推薦入試と AO 入試との最大の違いはその点にあった。

2014（平成 26）年度入試から全学的に始まった募集人員比 30%を目標とする入試制度の見直しをきっかけに, 農学部でも AO 入試の募集人員拡大を行ってきた。実施面における実行可能性や一般選抜とのバランスなどについて慎重に検討した結果，2022（令和 4）年度入試における募集人員は, 大学入学共通テストを利用しない AO 入試Ⅱ期が 23 名（募集人員比 15.3%），第 1 次選考で利用する AO 入試Ⅲ期が 22 名（同 14.7%），一般選抜前期日程が 105 名（同 70.0%）となっている。現在の農学部における AO 入試Ⅱ期は, 筆記試験に基づいて第１次選考を行い, 第２次選考はその結果に出願書類と面接試験の結果を加えて選抜する仕組みとなっている。

農学部では募集人員の拡大に伴って第１次選考で課す筆記試験の内容の見直しを行い，2020（令和２）年度入試から全学の筆記試験問題作成体制に加わることとなった。2021（令和３）年度入試においては「理数系科目の基礎的理解度の評価」を目的とした筆記試験①②と「英文読解力の評価」を目的とした筆記試験③を実施した。なお, 前者の一部に選択問題が導入されている。試験問題の傾向に鑑みると, 選択傾向は高校における理科の科目選択に対応している可能性が高い。

2.　目的

2021（令和３）年度入試において AO 入試Ⅱ期の実施後に以下の観点からの検証を行った。

① 第１次選考における筆記試験①～③の配点比（非公表）の適切性
② 第２次選考における筆記試験，書類審査，面接試験の配点比の適切性
③ 面接試験における信頼性（評価の一致度）
④ 問題選択による面接試験の有利不利

3.　方法

3.1.　入試データ利用手続き

東北大学農学部が管理する 2021（令和３）年度 AO 入試Ⅱ期の入試データを分析した。東北大学の入学者募集要項には入試データの取扱いに関する規定が明示されており, その規定に従った。第１著者が所属する東北大学高度教養教育・学生支援機構では, 入試業務に関連する内容のデータ利用及び研究発表について, 同機構内の業務組織

である東北大学入試センターの責任者であるセンター長の許可の下に実施することとなっている。本研究は東北大学入試センター長に報告し，了承を得た上で実施した。また，入試データに関しては第２著者が所属する東北大学大学院農学研究科の責任者宛てに「研究目的の利用」を含む利用目的を明示した「預かり証」を提出した。

3.2. 分析方法

3.2.1. 配点比の適切性

総合得点を構成する部分得点の影響力に関すして実施後の評価指標である共分散比を用いて検討することとした。

3.2.2. 面接試験の適否

面接点に関わる様々な指標について，複数の統計指標を基に多角的に検討することとした。

4. 結果

4.1. 第１次選考における筆記試験の配点比

第１次選考において筆記試験を構成する３つの試験の共分散比は，筆記試験①が 33.7%，筆記試験②が 29.5%，筆記試験③が 36.8%であった。全体としてバランスが取れており，配点を見直す必要がないことが分かった。

4.2. 第２次選考における筆記試験，書類審査，面接試験の配点比

表 1. 第 2 次選考における配点比と共分散比

	筆記試験	書類審査	面接試験
配点比	40.0%	30.0%	30.0%
共分散比	21.1%	35.8%	43.1%

第２次選考の配点は筆記試験が 400 点，書類審査が 300 点，面接試験が 300 点，合計 1,000 点であることが公表されているので，配点比と共分散比との比較を表１に示す。筆記試験の共分散比が配点比よりも小さく，影響力が強い順に面接英検，書類審査，筆記試験となっている。

4.3. 面接の信頼性，一致度

農学部の場合，第１次選考合格者数に応じて複数の面接員による複数の面接室が設けられ，受験生はそのうちの１つに割り振られる。各面接室の評価方針，精度を揃えるのは難しい。一致度は，一般化可能性係数と解釈できる α 係数で 50 ～ .74 であった。書類審査，筆記試験を加えて主成分分析を行ったところ，班によって評価基準がまちまちであることが分かった。

4.4. 問題選択による面接試験の有利不利

面接室ごとに筆記試験の成績と合否を分析すると，筆記試験成績が上位であった問題Ａ選択者が不合格となった面接室が複数あり，そのうち一つではかなりの得点差で逆転が起こっていた。ただし，全体としては問題Ｂ選択者が多く，筆記試験の得点も大きく散らばっていた。

なお，選択は面接員には知らされていないが，やりとりの中で判明している可能性は否めない。

5. 考察

第１次選考の配点比には問題がないことが確認された。第２次選考においては筆記試験のみに選抜効果が働く。農学部の場合，第１次選考は知的能力，第２次選考は情意的能力の側面が評価されるのが明らかである。知的能力が上位の受験生に対し，第２次選考で異なる側面から評価を行っているとの整理が可能で，受験者には分かり易い。

面接試験に関しては，面接内容や評価基準の統一に課題が残っており，今後の課題である。

「謝辞」

本研究は JSPS 科研費 JP21H04409 の助成に基づく研究成果の一部である。